
† 毒菓子五つ † ホラー短編集

† アラクネ †

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

＋毒菓子五つ＋ホラー短編集

【Nコード】

N1210B

【作者名】

＋アラクネ＋

【あらすじ】

初投稿作品です。『生きた人間の怖さ』に視点を置いて書いてみました。暇潰しに、一作品でも読んで頂けたら光栄ですm（――）m

真夏の午後

半月ほど前に正式に梅雨明け宣言が出されてから、連日30度を越す快晴の日が続いている。

夏の盛りの真っ青な空。照りつける太陽は強烈で、洗い立ての洗濯物は、ほんの数時間でパリリと乾く。清潔に仕上がった温かな衣類のくれる、ほんのちよつとした幸福感。

真っ白に輝くシーツをベランダの物干しから取り込んだ時、頃合いを見計らったかのように電話が鳴った。

『はい、西条です』

あ、こんにちはあ。リカですー。

『リカ！？あんななの！？』

やあだ、んな声出さないでよー。あはは。

『アハハじゃないわよバカ！あんな今どこにいの？』

ははは。内緒。

『内緒じゃないわよ、もー、本当にバカなんだから。いい年こいて家出なんかして……。和孝さんがどれだけ心配してるか分かってんの？！』

怒らないでよう。いいんだって、あんなバカ旦那。それよりたまには、一人で独身気分満喫ってのも楽しいよお。あはは。

『一人じゃないでしょ。子連れで何が独身気分よ』

あはは。ごもつとも。

『…夏樹ちゃんの様子はどうなの？こないだ肺炎で入院したばかりじゃないの』

うん、ナツは大丈夫。でもまだ食欲無くて、ちょっと発疹出てるから油断出来ないけど。

『発疹？病院行つたの？』

んー、まだ。でも青つてか紫っぽいのが薄ーく出てる程度だよ。肺炎の時に貰った薬飲ませてるから、とりあえず様子見てる。

『呑気ねえ。駄目よ、三才くらいの子なんて次から次に病気にかかるとだから。少しでも異変があったら即病院！これ鉄則よ』

んー、そだね。でも熱とか完璧に下がってるしなあー。

『そーやって油断してたから、肺炎の時も大騒ぎする羽目になったんでしょ』

あはは、ごもつとも。

『頼りないわねえ…。やっぱり様子見に行くわ。おとなしく潜伏先を白状なさい』

んー……。でも。

『何よ、親友の私に來られちゃ困るってわけ』

いやー、そうじゃなくてえ……

『和孝さんに居場所喋られないか心配って？』

うんー…。

『信用ないなあ。てか、いい加減に和孝さんのこと許してやったらどうなの？』

…だってさあ。だってあいつ、よりによってナツに対してあんなひどいこと言っただよお？ ナツがもう……… だなんて。そう簡単に許せないよ。

『それだってもう、和孝さんは反省してるわけだし。自分が大人になって許してやるべきなんじゃないの』

………。んー。

『ま、旦那に内緒って言うなら私は何も言わないからさ。とりあえず遊びに行かせてよ？ 夏樹ちゃんに買った玉子屋のプリンが駄目になっちゃうじゃないよ』

え、玉子屋の？ あの並ばないと買えないって言う名物プリン？ マジ？

『言っとくけどあんたにじゃなくて、夏樹ちゃん用に、よ』

はーいいはい。

『まったく、あんたがいきなり連絡取れなくなるから、賞味期限ギリギリだよ』

だーから、連絡しなかったのはゴメンって。じゃ、旦那には本当に絶対内緒だよ??

『分かってるってば。信用してよ』

へへ。じゃあメモしてねー。○○町2249の7 ウィークリープラザ……

電話を切った後、私は震える手を必死で宥めて受話器を置いた。全身にびっしりと嫌な汗をかいている。

「…緑？」

隣室にいた夫が気遣わしげに私の名を呼び、優しく震える肩を抱いてくれた。

私は夫を振り返り、微かに頷いて見せる。

「リカの居場所が分かったわ。すぐに和孝さんに連絡して」

夫が無言で電話に向かうのを見届け、私は窓の向こうに視線を移した。

輝く夏の、快晴の空。

真っ白に輝く太陽。あまりの気温の高さに、蜃気楼のように歪む大気。蝉の声。 私は強い吐き気を催す。

親友のリカが、肺炎で亡くなった娘の遺体を病院から盗み出して逃げてから、すでに二週間が経っていた。

P u r e ' G i r l (前書き)

清く正しい教会での日々。末路がどうあるかと、この誇りは確かなものなのです。

Pure Girl

朝7時ぴったり。

私は今朝も柔らかな絹のドレスを着させて頂き、良い香りを漂わせる広い食卓へと赴きました。

真っ白で清潔な壁には、至る所に聖母の神々しいお姿が刻まれています。その細工の美しさは言葉では言い表せないほどです。

テーブルにはすでに数人の少女達の姿があり、私は特に仲の良い少女の隣の横に行き、慎重深く席につきました。

「お早よう。ついに明日ね」

座った途端にそのように言われ、私は思わず真っ赤になってしまいます。

「嫌だわ。そんな風に明から様に」

「あら、どうして？あたし達はその日の為に、この潔癖な体を守り続けてきたんじゃないの」

清潔なテーブルクロスの上に、シスター達が朝食の盛られたお皿を並べていって下さいます。

真っ白なパン。じゃが芋とアスパラと人参が入ったポトフ。枝豆のスープ。

これが今朝のメニューです。質素だと思いいなるでしょうか？

私達は肉を摂りませんし、チーズやバターなどの乳製品も極たまにしか口にしません。

この身を清らかに保つ為には、そういった食事が一番適しているのです。

更に材料となる野菜も穀物も香草も、全てシスター達によって育てられています。余所から取り寄せた物では、農薬や添加物などの『不浄の毒』が含まれている危険性がありますから。

私達は《聖女》と呼ばれ、尊ばれる存在です。

私達はここで十数年の清らかな生活を送った後、それぞれ高貴な身分の殿方の元へと行くのが定めです。

それまでに清らかで純潔な肉体を維持すること。

それだけが、《聖女》に課せられた唯一、最大の使命なのです。

朝食を済ませると、私と友人のミネアは庭に遊びに出ました。

私達は、食事、入浴、就寝、起床の時間が決められている以外、後は基本的に自由です。

健康的な生活習慣を守り、ストレスを受けずにのびのびと暮らすこと。シスター達が《聖女》に望むのはそれだけですから。

「一緒に遊べるの、今日が最後だね」

青々と茂った芝生の上に仰向けに横たわり、ミネアはそう囁きました。

「ええ……。そうね」

そんな簡素な答えしか返すことができず、私は空を見上げました。綺麗な空でした。絵の具を垂らしたみたいな青い空に、ポツポツと浮かぶ真つ白な雲。

庭と呼ぶにはあまりに広すぎる草原の中で、私とミネアはどちらともなく手を握り合いました。空を仰いで寝転んだまま、そっと。

「…実はあたしも、来月に決まったんだ。西の都の領主様のご子息の所に」

「……………そうなの」

握り合う掌に、思わず力がこもりました。

幼い頃から親しんだ、この清らかな自然。綺麗な食物、綺麗な水、綺麗な空気、柔らかで優しい時間。

それらに充分に育まれた私達は、ついにここから巣立つ時を迎えてしまったのです。

「……………さようなら」

ミネアは首を横向け、微かに微笑んで見せてくれました。

その笑みがなぜか逆に胸を締め付け、私は何か言おうと口を開きました。けれど、開いた唇から紡がれる言葉は、一つもありませんでした。

翌日、早朝。

私はシスター達と聖母に祈りを捧げた後、誰に挨拶することも無く、静かに教会の門をくぐりました。

教会の敷地内から出たのは、これが生まれて初めての経験でした。初めて乗った車のガソリンの臭いには閉口しましたが、すぐに見慣れぬ光景の数々に気持ちを奪われ、私はすっかり夢中にさせられてしまいました。

土ではなく石に固められた道。見たことのない形の建物。街道を歩く人々の様々な衣服の色彩。

全てが魅力的で不思議で新鮮でした。

堪え切れずにあれこれと質問を浴びせる私をいさめることもなく、シスター達は丁寧に答えを返して下さいました。

その慈悲深い和やかなお喋りはこの上なく楽しく、車が目的地に到着した時には、少しがっかりしてしまった程です。

「さあ、お疲れさま」

シスターに促されて車から降りると、見たこともないような豪華なお屋敷が私を迎えました。

庭だけでも教会の何倍くらいあるのでしょうか？白い敷石は長々と続き、大きな池の周りを囲む緑は、全て白鳥の形に刈られています。どんな魔法使いが、あの木をあんな風にしたのでしょう？

「さあ、こっちですよ」

煌びやかな景色に心奪われた私の手を優しく引き、シスターはお

屋敷の玄関に静々と進んで行きました。

金の細工で縁取られた重々しい扉を開き、タキシード姿の老紳士が、丁寧に敬礼して下さいます。

シスターに習って敬礼を返した私は、顔を上げた拍子にふいに気付いてしまいました。

(……………あ)

玄関の斜め上にあるバルコニー。そこからそつと密やかに、微笑みを湛えてこちらを見下ろしている優雅な存在……。

私の様子に気付いた老紳士が、訝し気に視線の先を追い、彼に気付きました。

「フイレツイオ様！」

咎めるような、けれど決して鋭くない声が彼の名を呼びました。

彼の姿がバルコニーから消えたのは、ほぼ同時だったでしょう。

「申し訳ありません。祝杯の前に聖女様を拝見なさるなど、あの方ときたら何とはしたくない……」

慌てて謝罪する老紳士の声を聞きながら、私は心臓の鼓動が苦しいほどに早まるのを感じていました。

(ああ。あの方が、私の)

ほんの一瞬でしたけれど、その美しい金色の髪。引き締まった均整の取れた体。優美な身のこなしは、はつきりと私の目に焼き付いていました。

(ああ)

私はそつと自分の高鳴る胸を押さえました。

(今夜、私はあの方と一つになるのね)

老紳士が説明を加えながら案内してくれた廊下を、私はほとんど夢現つのまま進みました。

やがて銀色の大きな扉の前まで来ると、シスターはつないでいた私の手をゆっくりと離しました。

「ここで準備をして、宴に備えることになります」

僅かに伏せ目がちに、シスターが私の頬を優しく撫でて下さいました。

「…………シスター。これまで育てて頂いて、本当にありがとうございました」

別れの言葉と共に恭しく頭を下げ、私は老紳士の開けてくれた銀扉の向こうに、静かに足を踏み出しました。

背後で扉が閉まる瞬間、シスターの消え入るような さようならを聞いたような気がしました。

そこは、全面真っ白なタイル貼りのお部屋でした。

真っ白な服を着た何人もの男女が、既に私の為の準備を、忙しく進めて下さっていました。

大きな大きな調理台。ぐつぐつと湯気を立てる銀の鍋。研ぎ澄まされた様々な形の包丁。新品の大型オーブン。たくさんのスパイスやオイル。

私は着ていた物を全て体から落とし、調理台へと自ら向かいました。

これから私はここで丁寧に切り分けられ、炒められ、茹でられ、煮られ、特上の美味へと姿を変えるのです。

清潔な空気と飲食物、伸び伸びとした自然に育まれたこの肉体が、不味いことなど絶対にありえません。

私は先程見た美しい方のことを想い、調理台に横たわったまま少しだけ微笑みました。

今夜、この肉体はあの方の口にだけ入り、血となり肉となり、絡んで溶け合い、一つに混じり合うのです。

P u r e ' G i r l (後書き)

† カニバリズムネタでした。楽しんで頂けたなら、幸いなのですが…

悲しい恋の

私は美しくありません。

カーテンの向こうで、シルエットだけの女は、静かな口調でそう言った。

だから私の姿を見る前に、私の中身を知って下さい。私の本質を知って下さい。外見による先入観を持たずに、どうか――。

僕は黙って彼女の申し出を受け入れたけれど、結局は彼女にとって不幸な結末しか待ち受けていないことを、漠然と知っていた。

僕を慕う女性は何多い。僕は天から優秀な才能を貰い受けた芸術家であり、自身の美しさも、それさえが芸術の一端であるかのよう完璧だ。

僕は誰よりも芸術を愛していたが、それを造り出す人間に対しては愛情を感じたことがない。

どんなにその若さや美しさ、時には夜の営みの巧みさを誇示されても、僕は生身の人間自身には興味を抱けないのだ。

彼女もやがて、諦めの涙を流すことになるだろう。

今まで自分の前を通り過ぎていった女達の姿を思い浮かべ、僕はぼんやりとそう思う。

朝。僕は朝食も摂らずに屋敷を出て、朝もやに霞む湖や森をスケッチして回る。

この地方特有の珍しい小石や木の実を拾って屋敷に戻ると、もう昼近くだ。

買ってきたパンで軽く食事を済ませ、スケッチや収集物を元に頭

の中のイメージと構想を、スケッチブックに叩きつける。

ここから生まれるのが絵画なのかジュエリーなのか彫刻なのか、まだ僕自身にも分からない。

ただイメージを、それが廃れないうちにひたすらに書き殴る。

まるで頃合いを見計らったかのように、絶妙のタイミングでドアがノックされるのは、僕がふと疲れを感じ始めた午後の半ば過ぎと決まっていた。

「お疲れ様です。よろしければ、お嬢様のお部屋でお茶でも如何でしょうか？」

彼女専属の人形のようなメイドは、いつも表情の無い顔で同じ台詞を言う。

僕が必ずYESと言うのを分かっているが。

メイドは静かに頭を下げると、凝った作りのメイド服を揺らして僕を導く。屋敷の最奥、彼女の待つ部屋まで。

白で統一された陽当たりのいい部屋で、僕はメイドの少女に紅茶や菓子を振る舞われながら、彼女の芸術を余すことなく堪能した。

ある日は、清らかで繊細な美しい歌を。

ある日は、様々な表情を持ったミステリアスな絵画を。

ある日は、今にも動き出しそうな強い躍動感に満ちた、瑞々しい彫刻を。

僕は本心から彼女の作品を誉め讃え、カーテン越しに意見を交わし合うのを楽しんだ。

事実、彼女の作り出したものはどれも本当に素晴らしかった。

芸術作品に精通しきった僕をも強く引き付け、魅了してしまう程に。

けれど。

だからと言って、彼女自身を愛せるかどうかと言うのは、全くの別問題なのだ。

僕は惜しみ無く彼女の作品に対する好意と尊敬を口にしていたけれど、彼女本人に対する関心は微塵も示すことは無かった。

カーテン越しとはいえ、彼女の切なそうな雰囲気は充分に察していた。

けれど、そればかりはどうしようもない。

僕は連日、そうやって自室と彼女の部屋を往復して過ごした。

彼女の細やかなアピールは多彩な広がりを見せ、最後の二週間に振る舞われた手製の夕食は、僕を大層喜ばせた。

温かいスープ、パンかサフランライス、付け合わせ程度の魚料理と野菜に、メインの上等な肉料理。

大体がこのパターンだったが、毎回工夫を凝らした絶妙な味付けは、飽きなどとは無縁のもの。各地を回り、あらゆる美味を経験した僕ですらを唸らせるくらいに。

全く、この大きな屋敷の女主人は、本当に何と様々な才能に長けた人なのだろう。

僕のような男を慕ってさえいなければ、きっといくらでも女性としての幸せを得ることが出来たのだろうに。

それを想う時、僕は憐れむような、悲しむような、不思議な気持ちに捕われてしまう。

上品で控えめだが、冗舌だった彼女。

カーテン越しのお喋りは最後の頃には急激に減り、諦めたような、脱力したような、悲しげなものに変わってしまった。

屋敷で過ごす、最後の日。

ようやく自分の作品を完成させた僕は、夕方、いつものようにメイドと呼ばれて彼女の部屋に赴いた。

室内は煌びやかに装飾され、テーブルには凝った料理が一皿と、ワインのボトルだけが用意されている。

「。レディ」

僕はそつとカーテンの向こうに呼び掛けた。

今日まで屋敷に間借りさせてもらっていたこと。

結果、とても良い作品が出来たこと。

彼女の芸術は本当に素晴らしいかったこと。

それらを、感謝と共に伝えようとした。

しかし、カーテン越しの彼女が応えてくれることなく、重い沈黙が僕を威圧する。

「さあ。どうぞ」

メイドが冷えたワインをグラスに注ぎ、温かいうちにと料理を勧めてくる。

少しばかり後ろめたい気持ちで、僕は丁寧に料理を切り分け、口に運んだ。

スパイスの効いたソースと濃厚な肉汁が絡み、刻んで散らされたハーブが爽やかに香る。

「素晴らしい、味だ」

感嘆の溜め息と共に、僕は噛み締めるように呟いた。

それは良かった、と、メイドが零れるような笑みを浮かべた。少女の笑顔を見たのは、それが初めてだったかもしれない。

「お譲様も、大変お喜びですわ……」

メイドの華奢な指がカーテンにかかるのを見て、僕はハツとして食の手を止めた。

「お譲様は、心から貴方を慕っておいでですよ」

彼女と僕を隔て続けてきた、薄く脆い布の壁。

それがスルスルと巻き取られ、影だけだった女主人が、その姿を露にしていく。

「お嬢様は、一体になりたいと思うほどに、貴方を…」

メイドの言葉が半端に途切れた時、たつぷりとフリルを重ねた優美なドレスが、金系の刺繍を輝かせて僕の視界に広がった。

美しく、豪華だが嫌味ではない、彼女にピッタリな品のいいドレス。

「……………うあ…」

間の抜けた呻きが、思わず喉の奥から零れ出た。

美しいドレスはふんわりと椅子に掛けられているだけで、彼女はその上に全裸で腰掛けていた。

しかし、僕を放心させたのはその点ではない。

華奢な胴体。くびれたウエストはすんなりと細く、そこに付属するはずの手足は、四本とも根元からすっぱりと無かったのだ。

肩は肉を削がれて骨が露出し、乳房のあるはずの場所には、生々しい丸い傷跡があるのみだ。

「如何でしたか？この二週間の」

メイドがにつこりと、僕の顔を覗き込む。

「お嬢様の。お料理の。お味は……？」

嫌にゆつくりと丁寧に、言葉を紡ぐ。

「最初は右足。次は左。それから肩、左腕、乳房、最後に右腕……」

僕は食べ掛けの皿に目を落とした。

「ついに体力尽きてお亡くなりになったのは、ほんの一時間ほど前のことですね……」

僕は椅子を倒して、よろめくように立ち上がった。ふらつく足取りで一、二歩前に進み、彼女の屍にゆつくりと近づいた。

私は美しくありません。

自らそう言った彼女。

初めて見るその顔は確かに地味で華が無く、お世辞にも美しいとは表現しづらいものであった。

——しかし。

僕は呆然と彼女の前に立ち尽くしたまま、 たった今口に使っていた肉の味、数日間舌鼓を打ち続けた料理の味を、鮮明に思い出した。

その芳醇かつ濃厚な味わいと、彼女の顔が一致した、その瞬間。

僕は生まれて初めて、生身の人間に深い愛を感じた。

痴話喧嘩

…ひどく不愉快な感覚の中で、目を覚ます。

カーテン越しに差し込む陽射しは薄いが、それでも今の俺の目には痛い。

気怠い体を動かして時計を見上げると、今が正午少し過ぎだということが分かる。

俺は視線を巡らせて、半開きのドアの向こう、キッチンの隅に彼女の姿を見つけた。

「……マリア、…水」

頭が痛い。喉がひどく渴いている。

しかしマリアは、俺の声には応じてくれなかった。聞こえなかったのかと思い、同じ台詞をもう少し大きく繰り返してみる。それでも、返事はない。

「………？」

何気なく目をやったテーブルの上に、開いたままの新聞紙が放り出されている。

（……あ）

白黒の紙に印刷された真っ赤な蝶々の写真を認識した瞬間、俺は昨夜の記憶を断片的に取り戻した。

（………あー、…そっか）

昨夜、俺とマリアは、かなり派手な喧嘩をしたのだった。

原因は、本当に些細な下らないこと。

昨夜たまたま流れたニュース。それはこの県内で起きた、とある研究施設からの、実験動物逃走という内容だった。

その実験動物というのが、何のことはない。たった一对の、雄と雌の蝶々。

《………とは言え、この二匹は非常に悪質な毒を持っている上に、繁

殖力が異常に強いと言つことです。詳しいことは、今だ施設側が沈黙している為……」

キヤスターの恐れを煽るような物言いが、馬鹿馬鹿しくておかしかった。

そこで俺がつい口を滑らせてしまったのは、ビールと焼酎による酔いのせいに間違いない。

『ああ、これ、サキの家の近くだ』

言ってから（しまった）と思ったが、遅い。

グラスに氷を入れていたマリアの手がピタリと止まり、その表情がみるみる険しくなっていく。

サキとは俺の前の彼女の名前で、別れ際のイザコザで、マリアにまでかなりの迷惑をかけている。

俺に散々付き纏い、当時まだ付き合いたてだったマリアを脅し、あらゆる嘘を吹き込んで……。

マリアにとっては、存在自体が汚らわしい、天敵のような女の名前なのだ。

俺がそれを口にしたことを、酒の入ったマリアが聞き流してくれる筈もなく。

『何よ？あの女が心配なわけ？』

『あ……いや、俺は』

『私があの子のせいでどれだけ嫌な思いしたか！せつかく忘れてやってたって言うのにあんたは』

……後はもう、蛇口全開の水道の如く、文句と昔の恨み言の嵐。

途中でさすがに頭にきてしまった俺と、近所迷惑極まりない、深夜の大喧嘩を繰り広げたのだった。

（……あー、くっだらねえ）

怒りに任せて酒を呷った皺寄せが、この頭痛と倦怠感だというわけだ。

俺は溜め息混じりに枕に突っ伏し、ぐったりと横になったままキツチンの方を見た。

「…なあ、昨日は俺が悪かったよ。本当、謝る」

返事はない。代わりとでも言うように、キツチンの床に何かが放られる。僅かに開いたドアの隙間に目を凝らすと、それは何かの菓子空箱らしかった。

（いつもダイエットダイエットって、甘い物は食わねーのに）

訝しんでから、すぐに昨夜の自分の台詞を思い出す。

『テメーなんかいくら痩せたって、サキの半分も綺麗になんかならねえよ』

…再度、溜め息。

よく見るとキツチンの床には、他にも様々な菓子の空箱や包みが散乱しているようだった。

（…うーわ、こりやかなり重症だわ）

過度の飲酒のせいで、記憶が半分以上曖昧になっている。しかしダイエットマニアの彼女をやけ食いに走らせたのは、間違いなく自分なのだろう。

怒り任せに何を口走ったのか、思い出すのも恐ろしい。

「なー、マリア。本当にゴメン。俺も興奮してたし、酒も入ってたし」

返答は、冷たい沈黙。

「全部、本気で言ったことじゃないしさあ。大体お前だって」

俺のどんな弁解の言葉にも、マリアは反応してくれない。この位置からでは彼女の顔は見えないが、どんな表情をしているのかは容易に想像がついた。

「なー、あの女のことはもう済んだ話なんだし」

そう、済んだ話なのだ。

マリアにまで迷惑をかけてしまった詫びに、俺がきちんと自分で始末をつけたのだから。

『あたし、妊娠してるの』

勝ち誇った顔でそう言ったサキ。二人きりで話そうと言う俺の言葉信じて、のこのこと車に乗り込んできた馬鹿女。

人気の無い山道で力一杯殴り付けた時の、例えようのない爽快感は今でも忘れられない。

はいずって逃げようとするサキを懐中電灯で照らしながら悠々と追い、何度も何度も硬い革靴で蹴り上げてやった。あの時の、みつともない、惨めな顔と言ったら。

俺がフィと車の方に戻って行った時、サキはきつと心の底から安堵したことだろう。

そして再び懐中電灯の明かりが自分目指して迫ってきた時、心の底から絶望したことだろう。

俺は車の中に用意していた鉈を振り上げ、サキの擦り傷だらけの細い足に打ち下ろした。華奢に見えた足の骨は思っていたよりも硬く、死に物狂いで抵抗されたせいもあって、完全に切断するには数十回も鉈を振るわなければならなかった。

（あいつ死んだかなあ。死んだよな）

俺はベッドの上でひっそりと苦笑いを漏らした。

サキは逃げる時、山のかなり奥深くまで迷い込んでいた。鉈を取りに車に戻った時、再びサキを見つけるのに苦労したほどだ。

なので、両足を切断されて泣き喚くサキにとどめは刺さず、俺はそのまま山を下りたのだった。

（まあ、自業自得だよな）

サキの断末魔を思い出すと、少しだけ頭痛が和らいだ気がした。

俺はゴシゴシと乱暴に目を擦り、のっそりとベッドの上に起き上

がった。ベッドサイドに烏龍茶の缶を見付けて、有り難く一気に飲み干す。ぬるかったが、今の俺には充分にうまかった。

「なー、マリアちゃん」

ひと心地ついて、彼女の機嫌取りを再開する。我ながら熱心なことだ。

「もう絶対にあの女の名前は出さないからさあ。俺がアレと関わることは二度とないわけだし」

猫撫で声で言うと、そこで初めてマリアが反応を示してくれた。

「当然よ」

たった一言だったが、とりあえず第一関門は突破という所か。俺がホッと息を吐きかけた時、マリアがポツリと続けた。

「……生きてるわけ、ないもの」

一瞬だけその意味が理解出来ず、俺はポカンとキッチンのドアを見詰める。

「……………」

マリアはまた黙り込んでしまった。

俺は目を白黒させて、何度も彼女の言葉を頭の中で繰り返した。生きてるわけない、生きてるわけない、生きてるわけ……………

（喋った？ 酔った勢いで、俺は喋っちまったのか？）

鈍い頭をフル回転させて記憶を辿るが、やはり昨夜の記憶は途切れ途切れだ。まさかとは思うが、勢いで喋っていないとも言いきれない。

俺は慎重に、彼女の気配に注意しながら、聞く。

「……えーと……？ ……何で、生きてないって……？」

マリアの返事は短いものだった。助かる筈ない。たった一言、それだけ。

（うわ…………マジかよ）

俺は頭を抱えて地団太を踏みたくなった。

もし喋っていたとしても、今ならまだ《酔った勢いでついた悪質な嘘》で通るだろう。

しかし、今後、あの死体が誰かに見付けられたとしたら？身元を特定されて、その凄惨な死因と共にニユースで流されたら？

ニユースを見たマリアは、一目散に警察に駆け込むに違いない。

（あーあ。……最悪）

俺はボリボリと頭を掻きむしり、布団をはね退けてベッドから降りた。

散らかった缶や瓶を蹴って避け、目を細めてキッチンの向こうを窺う。

（でもまだ確かじゃないよな。確証はないしな）

一縷の望みを握って、俺はゆっくりと寝室兼リビングを横切っていく。

（…だけど、もし、喋っちまったら…）

それを考えた時、思わず口の端が上がるのを感じた。

（その時は……）

生きた人間を、徹底的なまでに破壊する快感。サキを痛めつけた時の激しい高揚感が、リアルに脳裏に渦巻き始める。

（その時は……仕方ないよなあ）

俺は冷たい笑みを浮かべて重い酒瓶を拾い、キッチンのドアを開いた。

マリアは出窓の前に佇んでいた。俺に背を向ける形で、少しだけ開いたカーテンの間から、身動きもせず窓の外を眺めている。

「マリア」

俺は酒瓶を握った右腕を後ろに回して隠し、さりげなくマリアの後ろに近付いた。ウェーブのかかった長い髪から、嗅ぎ慣れたシャンプーの甘い香りを感じて。

そして俺はマリアの背中越しに、カーテンの隙間から、それを見た。

道にいくつも転がる青黒く変色した人間と、その醜く膨れた死体に集まる、夥しい数の、真っ赤な蝶達の群れる姿を。

想い、開く

「ほら、子供じゃないんだからさあ」

呆れたように、彼が私の腕を引く。

「……………うう」

情けない声を漏らして、それでも躊躇してしまふ私。

真昼の鮮やかな陽の光に照らされたその看板には、大きくゴシック体で《桐沢歯科医院》と記されていた。

この県内ではかなり有名な歯科医院だ。自宅からはかなり離れているのだが、評判の良さを第一に、わざわざ一時間近くもかけてやって来た。

……にも関わらず、私は怯えて扉をくぐる事が出来ないでいる。

「やつぱり……………怖いよお」

は「っ」と、彼の長い溜め息。

自分でもこんなの、情けないとは思うのだ。

だが、理屈抜きでとにかく怖くて仕方ない。無防備に大口を開け、他人に自分の歯を突いたり削ったりされるなんて。想像しただけでも、背筋が冷たくなってくる。

幼少期に何かトラウマになるような出来事があったらうかと思えてみるが、そんな記憶は一欠けらも見つからない。

私は物心ついた頃から、意味も無く異常に歯医者を恐れる子供だった。

小学校で行われる単なる歯科検診でさえも怯えて大泣きし、親や教師を困惑させたほどだ。

「……あのさ、医者にかかって一時だけ怖い思いするのと、それをずっと放置して痛い思いし続けるの、どっちがいいよ？」

彼が私の右頬を指差して、ビシリと聞いてくる。

正論だ。虫歯を認知しながらも歯医者を恐れて放置した結果、今

や私の右頬は傍目にも明らかなほどに腫れている。痛みも、決して無視出来るレベルではない。

もはや医者に助けを求める以外に方法はないのだ。

……でも…。

業を煮やした彼が、返事を待たずに私の腕を引いて院内に引きずり込む。

私も半泣きになりながら、ようやく観念する。

診察台に横たわり、私はコチコチに固まったまま医者の動きを凝視している。

「大丈夫ですからねー。リラックスして下さいねー」

医者が困ったように笑い、子供に言うような声色で私を宥める。

キューイーン、という医療器具の耳障りな音。

24才にして、初めての歯科治療体験。リラックスしようにも、無意識に脳が警戒信号を発してしまう。

「じゃあ始めますよー。大丈夫ですからね」

恐ろしい器具と、マスクをした医師の顔がゆっくりと近づいて来るのを見て、私はぎゅっと目を閉じた。

闇の中で、キーンと響く嫌な音。医者の顔が近づいて来る、確かな気配…。

…ふいに、薬のにおいが消えた。

響いていた医療器具の音も、待合室から漏れる談笑の声も、看護婦がせわしなく動く音も、全て、蓋をしたようにピタリと、止まる。

(……………?)

静寂。

背中椅子の感触がいやに硬くなったと感じた瞬間、頭を押さえつける強い圧迫感に気がついた。

（何！？）

反射的に目を開いた私が見たのは、冷たい目をした若い男達の姿だった。

もちろんさつきまで私を宥めていた医師ではない。全く知らない、不可思議な服を纏った男達だ。

「……っ！」

起き上がろうとして、それが叶わないことを私は知る。

『無駄なあがきは見苦しいですよ』

『そうです。諦めて己の罪を浄化して下さい』

『泣こうと喚こうと、貴女様の罪はもはや許されぬもの……』

奇妙な格好——重々しい甲冑に兜——をした男達が、丁寧な口調ながらも次々と私を罵る。

「……っあ……あふっ」

言葉を発そうとするが、いつの間にか口に妙な器具を嵌められていて、間の抜けた呻き声を漏らすしか出来ない。

（なに………？…コレ……）

目だけをキョロキョロさせて、辺りを窺う。

そこは薄暗い、煉瓦の壁に囲まれた部屋だった。

点された蝋燭の炎だけが陰気に室内を照らし出し、私は腕を背中に回した格好で、テーブルのような物の上に仰向けに横たわっているようだった。

両手足はそれぞれ一括りに縛り上げられ、肩や頭を四人の男達にきつく押さえ付けられている。

（どうして？私は何をしたって言うのよ！？）

叫んだつもりだったが、言葉にならない。嵌められた何かの器具のせいで、口を大きく開いたまま、閉じることが出来ないのだ。

『…それでは、始める』

甲冑に身を包んだ男の一人が、抑揚の無い声で短く告げた。

私を押さえ込んでいる手に一層力が込もり、前歯の一本に硬い何かが触れた。

（なに……？）

次の瞬間、私はグギ、という醜い音を、自分の内部から聞いた。

「……っ！？がっ……！」

凄まじい衝撃が全身を走り、戒められた体がビクリと跳ねた。力ツと見開いた目で見たのは、私を冷たく見下ろす男の、凍り付くような目。

男の手に握られているのがペンチで、そこに挟まれた赤く濡れた物が自分の歯なのだと理解するまでに、少しばかり時間がかかった。「へひ…っひはああ！」

男は無造作に血塗れの歯を投げ捨てると、スッと屈んでまた別の歯をペンチで挟んだ。

「ひいっ…ひいひい！！！」

ガツチリと挟まれた歯が、渾身の力で強く前に倒される。引きずられそうになる私の頭を別の男達が押さえ、ペンチの柄が顎に触れたと思つた刹那…

ブチッ

歯が私の体から離れ、口の中にドツと生臭い血が流れ込む。

獣のような絶叫が喉の奥から迸しり、あまりの激痛に息が詰まった。必死で逃れようとがくが、鍛え上げられた兵士達の力はあまりに強く、暴れて痛みを紛らわすことも出来ない。

また別の歯が挟まれる。釘抜きの要領で力を加えられ、歯茎をズタズタにしながら乱暴に引き抜かれる。

痛い痛い痛い痛い！！

私の悲鳴に混じり、歯が床に落ちる悲しい響きが聞こえる。拷問

者の手が、また次の歯にかかる。容赦なく、冷酷に、機械のように。もう止めて止めて止めて！死ぬ、死んじゃう！！

抜かれる歯の一本ごとに、確実に猛烈な痛みが倍増していく。私の狂ったような絶叫にも、男達は眉一つ動かさない。

あああ、痛い痛い痛い、畜生、畜生！！

口を中心に顔全体がドクドクと脈打ち、頭が倍以上にも膨れ上がったかのように感じた。

ああああああああ

奥の歯を抜くのにてこずっているのか、ペンチが苛立たしげに口の中を掻き回す。もう痛みの限界だと思っていたのに、更に上をいく激痛に、私は弱った喉から新たな絶叫を絞り出され、痙攣する。

あああああ、痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い

口の中、頬の裏の肉をえぐり取るような感じで、ようやく奥歯が抜かれた。尋常ではない痛みに気を失いかけるが、その度に顔に塩水をかけら、荒々しく覚醒させられる。

よくもよくもただの兵士の分際でわたしにこのわたしにあああ痛い痛い痛い

先ほどのでコツを掴んだのか、男は次々と奥の歯を始末していく。目や鼻に入った塩水が粘膜を刺激し、口に流れ込んだ水が、焼け付くような傷の痛みを倍化する。

ああああ畜生畜生畜生

生暖かい尿が股間を濡らすが、もはやそんなこと気にする余裕は無い。

激痛に悶え苦しみ、恐怖と混乱で荒れ狂った意識の中で、私は逃れられない死を意識した。

…そうだ。

…そうなのだ。

…私は、死ぬのだ。

すぐにではない。

歯を全て抜かれ、腫れ上がった口から血を垂れ流したままの私は、この後、城の壁に塗り込められる。

狭く暗い、部屋と外壁との間の、僅かな空間。それが私の墓となる。

餓死するのか、狂い死ぬのかは分からないけれど。

…ああ。

…ああ、そうなのだ。

私は。

私はアデュレイル妃殿下。

父親ほども年の離れた国王の元に、無理矢理嫁がされた哀れな女。

我慢と退屈に満ちた息の詰まるような生活を紛らわしてくれたのは、近衛隊長を務めていたある男との、ほんの一時だけの逢瀬。

人目を盗んで語り合い、触れ合い、愛を口ずさんでいる瞬間だけが、私が私でいられた時間。

耐えて耐えて、耐え抜くしかなかった、辛い王妃としての日々。それを紛らわすほんのささやかな幸福を、たった一筋の脆く淡い光を、一体誰が粉々にした？

知っている。

私は知っている。

他でもない、愛しい近衛隊長の実の弟。

シバという名のただの兵士が、自らの出世の為に、私と兄の関係を王に密告したのだ。

そして彼は死んだ。

私が拷問死するよりも、ずっと早く。

愛するあの人は、私の目の前で、虫けら同然に切り殺されたのだ。ゴミを叩き捨てるように、無惨に、今まで懸命に生きてきた人生を全て否定される形で、最期の言葉を残すことも許されず。

……ああ。

…ああ、どうして。

…どうして私は、今まで忘れていたんだろう？

あの時、あの暗闇で。苦痛と絶望と呪いに満ちたあの壁の中で、あれほど。

あれほど、シバへの復讐を誓ったというのに。

治療が終わり、私は晴れ晴れした顔で診察室から出て来た。
漠然と生きて来た日々鮮やかな色が塗られ、これから全く新しい日々が始まるのを全身で感じていた。自分の生まれてきた意味を、果たすべき事を、ようやく思い出すことが出来たのだから。

明るい表情の私を見て、彼が勝ち誇ったような表情を浮かべる。
「ほーら、な？ 実際やってみりゃ大したことなかっただろー？」
私は満ち足りた気分を振り返り、にっこりと微笑みを浮かべた。

無邪気に笑顔を返す彼の顔。
そこに見間違えようもない、憎きシバの面影が宿っているのを、
私は冷たく確認した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1210b/>

† 毒菓子五つ † ホラー短編集

2010年10月21日23時45分発行